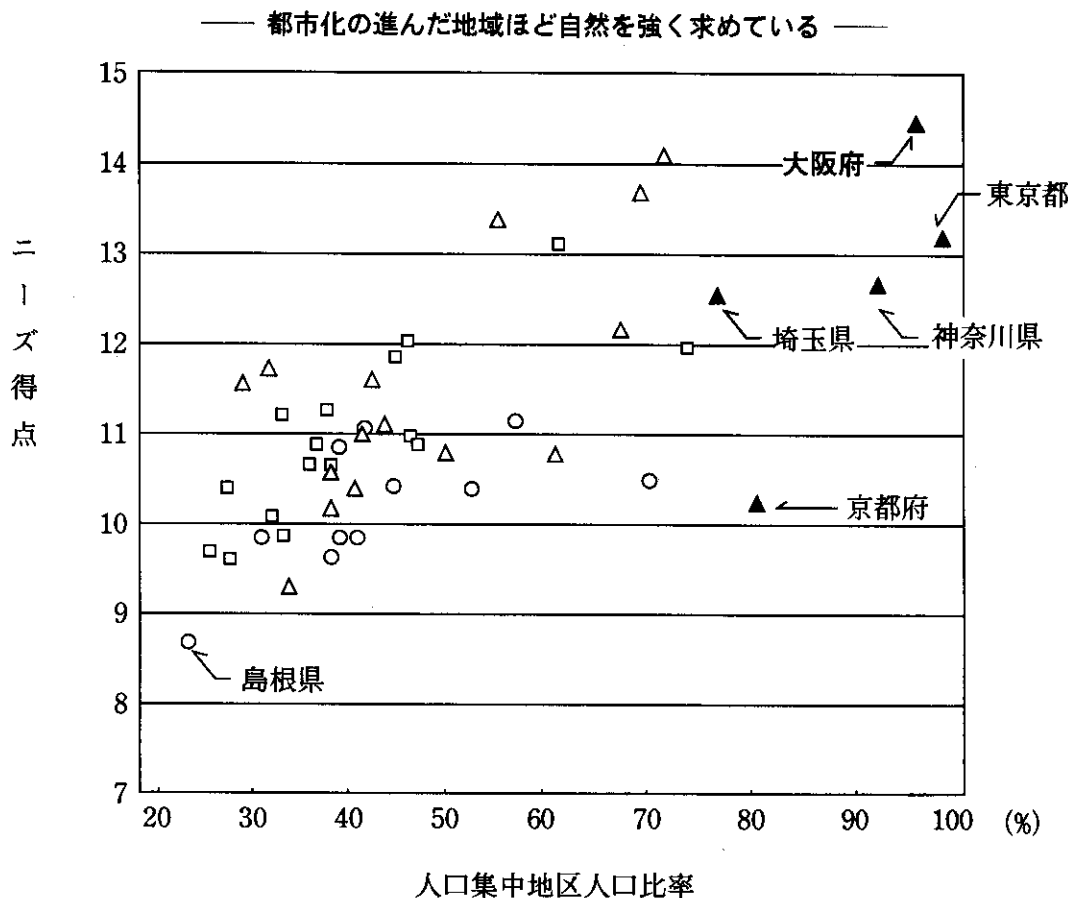


第2節 自然環境

第1 自然環境の役割

自然は森林や水の働き等を通じて、大気や水的环境調節や国土保全などの役割のほか、森林、農地、海など素材生産の場の提供など、生活環境に不可欠な役割を果たすとともに、“やすらぎ”や“ゆとり”、“うるおい”といった、人の心や健康に有益な効果をもたらすなど、様々な役割を果たしており、「自然と人間との共生」の視点のもとに、府民の共有財産として自然環境の保全・回復を図る必要がある（1-60～61図）。

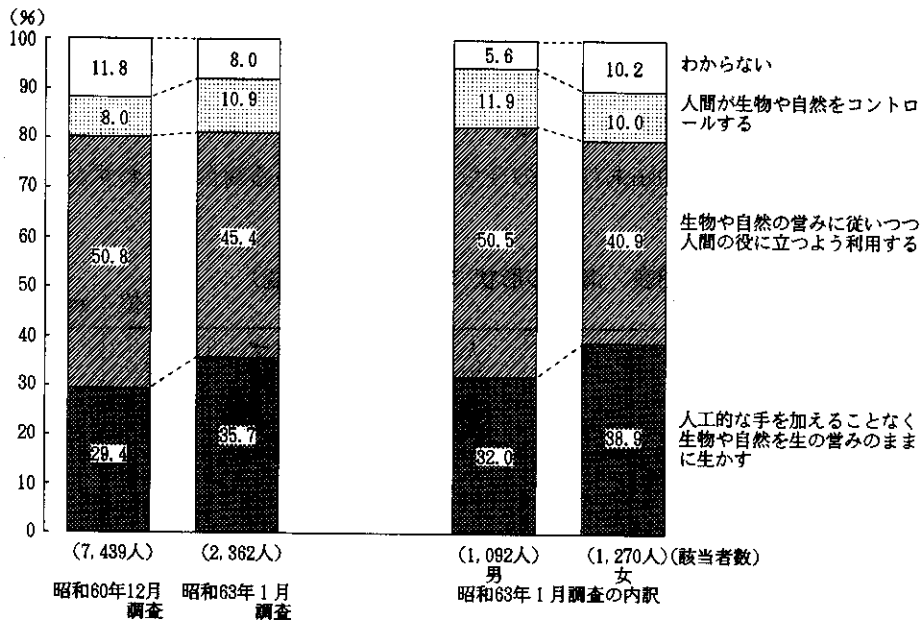
1-60図 都市化と自然へのニーズとの相関



- (注) 1 資料出典：平成5年版「国民生活白書」より
 2 ニーズ得点とは、調査対象者の今の、あるいは、これからの生活にとって「まわりに親しめる自然があること」が、どれくらい重要なことか、また、現在どの程度満たされているかを、それぞれ5区分で尋ね、重要度、充足度それぞれに低い方から1～5点を付けた上で、次の式により設定。

$$\text{ニーズ得点} = (\text{重要度得点}) \times (\text{未充足度得点})$$
 <未充足度得点とは6-充足度得点>
 なお、調査対象は、全国の15歳以上の男女4,172人。
 3 人口集中地区人口比率とは、各都道府県の人口集中地区に居住する人口が各都道府県人口全体に占める割合 (%) である。
 4 記号は、○が1人当たり都市公園面積（平成2年3月末現在）8m²以上、□が6～8m²、△が4～6m²、▲が4m²未満の都道府県を示している。1人当たり都市公園面積の算定に当たっては、都市計画区域内人口を用いた。

1-61図 自然と人間の関係についての意識調査結果



資料：総理府「環境問題に関する世論調査」（昭和63年）より

第2 地勢の特質

1 地質

大阪府は、三方を北摂、金剛生駒、和泉葛城の三山系に取り囲まれ、西は大阪湾に面し、淀川、大和川による沖積平野と中小河川沿いの丘陵・平野で構成されており、原生的な自然は少ないものの緑や水といった自然環境が身近にあるという面において立地条件に恵まれた地域である。

山地部の地質については、北摂山地の大部分は、中・古生層からなるが、茨木市から能勢町にかけて茨木複合花崗岩体が分布しており、碎石・マサ土の採取が行われている。金剛・生駒山地は大部分が領家花崗岩類からなり、北生駒は風化が著しく、標高も低いので、マサ土の採取による人工的改変地形が各所にみられる。

和泉葛城山地は、和泉層群及び泉南酸性火砕岩類からなっており、丘陵地帯は大阪層群、神戸層群及び段丘層から、沖積低地は沖積層からそれぞれなっている。

2 ため池

府域には1万余りのため池が点在するが、その大半は堺市、松原市及び八尾市を結ぶ地域から南の方に集中して分布しており、他は淀川水系の水が利用できない生駒山麓及び北摂丘陵地帯に分布している。大規模なものとしては、久米田池（岸和田市）、光明池（和泉市）などがある（1-62表）。

1-62表 ため池の状況

地域名	北 摂	大阪市	河内北	河内南	泉 州	合 計
ため池数	2,105	6	2,383	3,527	3,600	11,621

平成5年4月1日現在 耕地課調べ

3 自然海岸

自然海岸とは、海岸部に人工的な構築物のない海岸のことで、砂浜、泥浜、磯浜、転石浜、岩礁、及び河口干潟等の種類がある。府において自然海岸は、南部の泉南市・阪南市・岬町に存在し、泉南市と阪南市の境には河口干潟が、岬町には岩礁が見られる。

府の海岸線は、総延長距離が約260kmあり、このうち自然海岸が占める割合は、わずか1%程度に過ぎない(1-63表)。

1-63表 海岸の形状(平成元年度調査)

(単位: km)

	岩礁	砂浜	人工海浜	緩傾斜護岸	消波ブロック護岸	垂直護岸	合計
自然海岸	2.8 (1.1)						2.8 (1.1)
半自然海岸	3.2 (1.2)	7.0 (2.7)					10.2 (3.9)
人工海岸			3.4 (1.3)	6.4 (2.5)	58.2 (22.4)	179 (68.8)	247 (95)
合計	6.0 (2.3)	7.0 (2.7)	3.4 (1.3)	6.4 (2.5)	58.2 (22.4)	179 (68.8)	260 (100)

(注) ()内は%

第3 植 生

大阪は、早くから文化が開け、多くの地域が活発な人間活動の場として利用されてきたため、自然植生の樹林は、山地の山頂部、急傾斜地、境内地等にわずかに残っているだけである。

府域を冷温帯と暖温帯に分けるとその大部分が暖温帯に属する。暖温帯は古くから利用の対象とされており、その大部分は、市街地や造成地、田畑及び果樹園となっているが、山地から丘陵にかけては、代償植生(人間の影響によって、本来の自然植生が様々な人為植生に置き代わったもの)としてモチツツジ-アカマツ群集、特にアカマツ林が広く分布しており、次いでコナラ群落の主として生駒山地に、スギ-ヒノキ人工林が北摂及び金剛の山地に分布している。自然植生としては、アラカシ群落、サカキ-ウラジロガシ群集及びコジイ-クロバイ群集がわずかながらも社寺、古墳及び急傾斜地に残存しているほか、貴重なものとしては岸和田市の意賀美神社にミミズバイ-スダジイ群落、堺市の美多弥神社にシリブカガシ群落等がそれぞれ残存している。

冷温帯の多くはスギ-ヒノキ人工林やモチツツジ-アカマツ群集などの代償植生に被われている。自然植生としては、妙見山及び和泉葛城山の山頂部にブナ林が残存しており、なかでも和泉葛城山のブナ林は国の天然記念物に指定(大正12年)されている。

冷温帯と暖温帯との推移帯(標高600~800mの地帯)にある高槻市本山寺などには、モミ、ツガの天然林が点在している。

また、淀川、大和川の河川敷には、ヨシ、オギ等が優占する湿原がある。

第4 緑 被 率

府域における緑被地（樹林により被覆された土地）は、府域面積の37.0%にあたる69,282haである。また、市街化区域内の緑被率は6.7%である（1-64表）。

これらの緑被地を立地形態別にみると山林が92.2%を占めており、山林以外の樹林は7.8%である。また、市街化区域における樹林は、山林を除くと、独立住宅地や公園・遊園地で多くなっている。

1-64表 緑 被 現 況

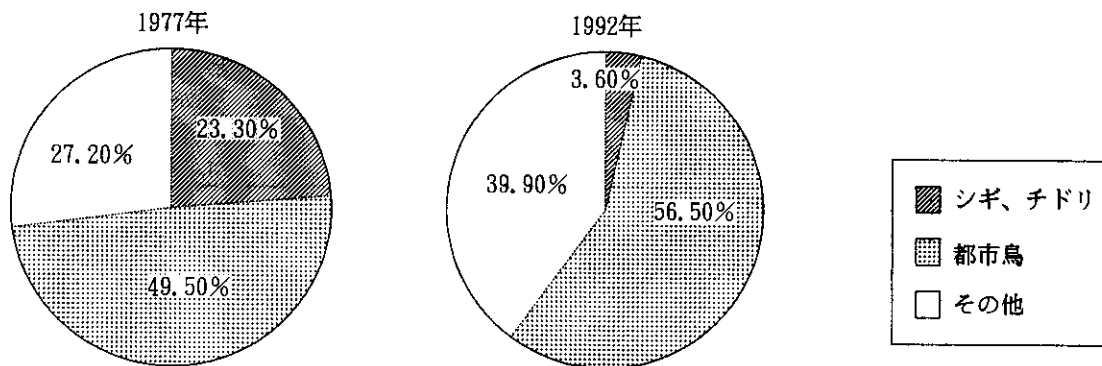
		区 域 面 積 (ha)	緑 被 面 積 (ha)	緑 被 率 (%)
平 野 部	市街化区域	87,951	5,858	6.7
	そ の 他	26,159	3,794	14.5
	小 計	114,110	9,652	8.5
山 地 部		73,108	59,630	81.6
合 計		187,218	69,282	37.0

- (注) 1. 56・57年の航空写真と地形図に基づき作成したものである
 2. メッシュ図による測定のため、実際の面積と若干の誤差がある

第5 生息鳥獣の特質

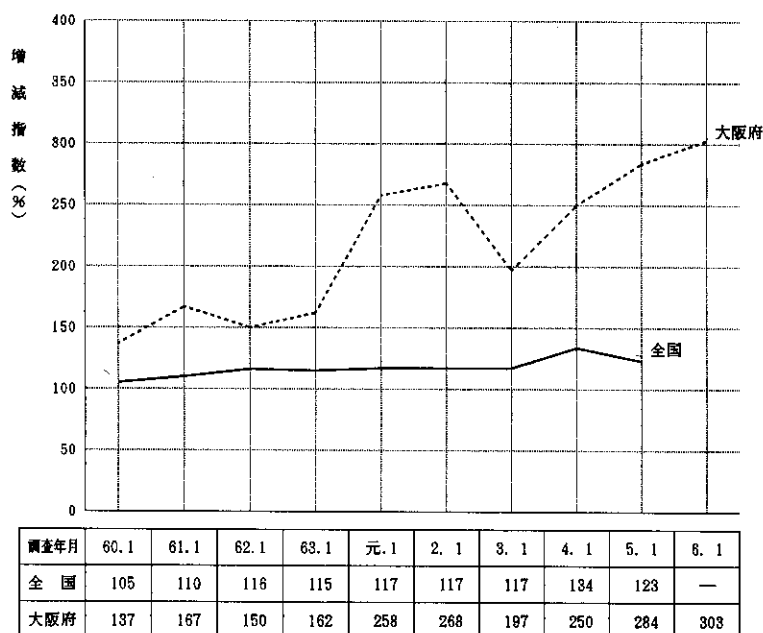
府域の野生鳥獣については、約30種の獣類と約270種の鳥類が確認されているが、各地域で生息する鳥獣の相は異なる（1-65～66図、1-67～69表）。

1-65図 夏期における全体に占めるシギ・チドリ類・都市鳥比率の変化



- (注1) 調査方法：府下41点において、夏期(1993年5月19日～7月20日)、冬期(1992年11月20日～1993年2月18日)に野生鳥類の生息状況を調査し、前回調査(1976年～1977年)と比較した。
 (注2) 都市鳥：スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバト、モズ、ハシブトガラス、ハシボソガラスの合計とする
 (平成4年 大阪府緑の環境整備室調べ)

1-66図 カモ類の生息数の推移



増減指数：昭和58年1月調査結果を100とする。

1-67表 ガンカモ科鳥類の生息地ベスト5の経年変化

調査年月 順位 (調査カ所数)	昭60.1 (71カ所)	平2.1 (143カ所)	3.1 (157カ所)	4.1 (165カ所)	5.1 (176カ所)	6.1 (187カ所)
1	淀川全域 5,848	淀川全域 7,719	淀川全域 3,372	淀川全域 6,394	淀川全域 8,826	淀川全域 8,873
2	産廃処分地沖北 1,741	大阪市北港 6,692	産廃処分地沖北 1,926	大和川全域 2,410	大阪市北港 3,795	大阪城公園 3,238
3	仁徳天皇陵 1,581	大和川全域 2,775	大阪市北港 1,884	大阪市北港 2,408	大和川全域 3,379	安威川全域 2,810
4	仲哀天皇陵 996	大阪城公園 938	日根野大池 1,289	南港野鳥園 2,153	南港野鳥園 1,761	大和川全域 2,301
5	大和川河口 910	仲哀天皇陵 906	大阪城公園 1,132	大阪城公園 1,305	安威川全域 1,208	神崎川 1,771

(注1) 表中、上段は生息地、下段は羽数

(注2) ガンカモ科鳥類の生息調査は、毎年冬期に日本に渡来するガン、カモ、ハクチョウ類の生息状況を把握するために、環境庁の呼びかけにより昭和44年度から全都道府県が一斉に実施している

1-68表 カモ類の種別順位 (平成5年度)

(単位：羽)

順位	種名	確認数	%
1	ホシハジロ	14,080	42
2	ヒドリガモ	5,887	18
3	コガモ	2,453	7
4	マガモ	2,119	6
5	カルガモ	1,872	6
6	ハシビロガモ	1,771	5
7	オナガガモ	1,617	5
8	キンクロハジロ	1,492	4
9	オカヨシガモ	794	2
10	オシドリ	482	1

1-69表 ニホンジカの生息頭数の推移

単位：頭

	1979年	1982年	1985年	1988年	1991年
能勢地域 剣尾山個体群	8~15	42~100	73~194	69~197	79~288
箕面地域 鉢伏山個体群	12~35	21~76	42~118	21~98	
高槻地域 ポンポン山個体群	4~10	10~24	15~53	11~46	
計	24~60	73~200	130~365	101~341	

(注1) 左の数字は最低確認数、右の数字は最大推定数を表示

(注2) 調査は、①オスジカ成獣の鳴き声調査及び②シカ生息地周辺の人々に対するアンケート調査の2方法により実施

(注3) 1991年の調査では②を生息域全域で実施したが、①の実施は能勢町地域のみであった。

(北摂山系)

箕面を中心に、アカネズミやモグラ、コウモリ等の小型哺乳類のほか、イノシシ、ノウサギ、テン等の中・大型哺乳類、合わせて22種の哺乳類が確認されている。

なお、溪流には貴重種であるカワネズミが、明治の森箕面固定公園には天然記念物のニホンザルが生息している。

鳥類については留鳥ではヒヨドリやシジュウカラ等が、夏鳥ではヤブサメやオオルリ等が、冬鳥ではツグミやアトリ等が、漂鳥ではルリビタキやアオジ等が確認できる。特に秋季の渡り期には、サンバ等のタカ類が大挙して渡るコースとなっている。

(金剛・生駒山系)

生駒山地は古くから人為の影響を受け、他の山系に比べ林層が乏しいため、生息場所は少なく、哺乳類については、ノウサギやヒミズモグラが広範囲に生息しているほかは、特筆すべきものはなく、また、鳥類については、留鳥ではウグイスやホオジロ等が、夏鳥ではホトトギス等が、冬鳥ではツグミ類やカシラダカ等が、漂鳥ではルリビタキやアオジ等が見られる。

金剛山地は、人為的な影響は他の山地に比べ小さかったが、植林等が進み、生息哺乳類相には影響がみられ、リスやムササビ等の小型哺乳類のほか、タヌキ等の生息が確認されている。一方、鳥類は多く、留鳥ではシジュウカラやエナガ等が、冬鳥では、ツグミやシロハラ等が、漂鳥ではアオジ等が見られ、夏鳥は府下で最も多く生息している。なお、ミソサザイ、クロツグミの府域で唯一の繁殖地である。

(和泉葛城山系)

生息環境に対する開発の影響は、奥山を持つ東部と、持たない西部とでは異なるものの、特筆すべきものはなく、哺乳類については、ノウサギやリス、イタチ等、いずれの山系でも見られる種が生息している程度である。また、鳥類については、留鳥ではシジュウカラやメジロ等が、夏鳥ではオオルリやホトトギス等が、冬鳥ではツグミやマヒワ等が見られる。なお、標高500m以上の地域には府域で最も大型のクマタカが生息している。

(平野・丘陵部)

哺乳類ではイタチ等が見られ、鳥類ではスズメ、ドバトが多数生息している。

また、春秋期には大阪市南港埋立地、泉南市男里川・樫井川河口の干潟にシギ、チドリ類が渡来し、冬期には仁徳天皇陵等の濠や淀川河川敷等に多数のカモ類が渡来する。

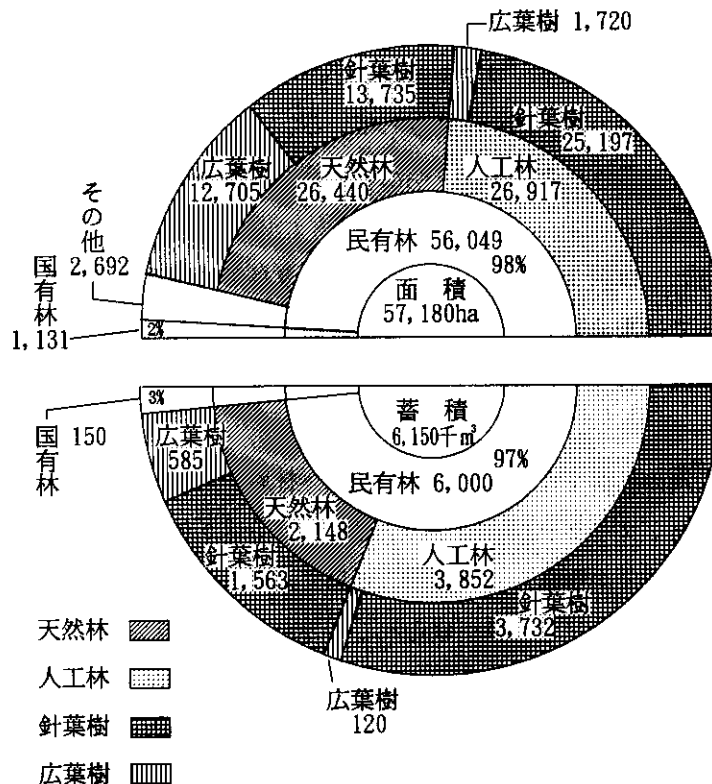
第6 森林・農地の推移

森林は、単に木材資源供給の場としてだけではなく、土砂流出防止、水源かん養といった国土保全機能、大気や水の浄化、気候緩和といった環境保全機能のほか、人の心に潤いを与える保健機能等の公益的機能を有し、また、野生生物の生息地としての重要な役割も果たしている。

府域の森林については、南河内など生産性の高い林業経営が行われている地域を除いて資産保持的な傾向が強く、森林の他用途への転用により林野面積は漸減の傾向にある（1-70図）。

一方、農地は都市化の進展に伴い、毎年減少の一途をたどっている（1-71表）が、高度成長期の減少幅とくらべると緩やかになっている。

1-70図 森林の比率



(注) 蓄積：木材や樹木の体積 (=材積) の総数をいう
 材積：立木又は造材された丸太、さらに製材された木材の体積をいう
 材積は、①実積、②層積に区分され、①は立木（枝条を含む）や丸太の実積をいい（大面積の立木群の材積を蓄積ともいう）、②は薪炭材などの小径木を一定の枠に積み重ね、丸太間の空間を含めて材積を測定する

1-71表 耕地面積の推移

(単位：ha)

年	昭 63	平 元	2	3	4	5
面 積	19,000	18,500	18,100	17,900	17,700	17,500

(注) 1 数字は各年8月1日現在の状況を示す
 2 近畿農政局調べ